# 大学文書館へ行こう

## 第9回「奉安庫」

北海道大学大学文書館　井上　高聡

1932年に改築した「奉安殿」の前面図（大学文書館蔵）

### 「奉安庫」と「教育勅語」謄本、「御真影」

今回は「奉安庫」です。「奉安庫」は、戦前期に、明治天皇が道徳教育の理念を示した「教育勅語」の謄本や、天皇・皇后の写真「御真影」を保管した堅牢な耐火金庫です。外面は鉄製、漆塗り、内部は檜製の収納です。日本国家を示す紋章「十六葉一重菊紋」や「五七桐花紋」、聖人の治世を象徴する鳳凰などをあしらっています。一九三一年に東京神田区の祝金庫本店が製造した旨の銘があります。

戦前期、小学校から大学に至る学校は、「教育勅語」謄本を文部省から、「御真影」も文部省を通じて宮内省から下付を受けていました。一月一日、「紀元節」（二月十一日）、「天長節」（天皇誕生日）、「明治節」（十一月三日）などの祝日・祭日には、学校に参集した教職員・生徒学生が「御真影」に礼拝し、学校長が「教育勅語」を読み上げる学校儀式を実施しました。学校儀式に使用するとき以外は、然るべき場所で厳重に保管することを、文部省や府県等が学校に求めました。当時、学校が火事になった際には、天皇の分身であるかのように見なされていた「教育勅語」謄本・「御真影」を救い出そうと命を落とす教職員が出たり、焼失してしまった責任を取って学校長が自殺するなどの事件が頻発しました。

### 北大の「奉護」体制

北大では、一九一九年に現在の南門近くに、五十平方メートルほどの煉瓦造平家建の倉庫を新築し、「教育勅語」謄本・「御真影」を保管しました。このように「教育勅語」謄本・「御真影」を厳重に保管・管理することを、仰々しく「奉護」と言いました。しかし、このころの北大の「奉護」では、「教育勅語」謄本・「御真影」以外の重要な物品・文書なども、同じ倉庫内に納めている状況でした。

一九二六年に昭和天皇への代替わりがあり、一九三〇年代に入っていくと、天皇を過剰に神聖視する社会風潮が広がり、文部省も「教育勅語」謄本・「御真影」のより厳格な「奉護」を求めるようになりました。そうした中で、北大は冒頭の「奉安庫」を用意します。さらに一九三二年には、先の煉瓦造の倉庫を「教育勅語」謄本・「御真影」だけを「奉護」する施設に改築しました。鉄筋コンクリートなどで耐火性を高め、外観に装飾を施し、スチール製扉を設置し、建物前面に柵を巡らしました。機能だけではなく、外観も「奉護」施設にふさわしい姿に変貌しました。こうした「教育勅語」謄本・「御真影」を「奉護」する目的の建物を「奉安殿」と呼びます。北大では、「奉安殿」と「奉安庫」により「奉護」していました。

さらに、四方英四郎名誉教授（植物病理学）のお話によると、戦時中、当時学生であった四方先生は、緊急時に「教育勅語」謄本・「御真影」を避難させる係であったそうです。空襲警報があると、「奉安殿」に駆けつけ、「教育勅語」謄本・「御真影」を持ち出し、サクシュコトニ川に掛かる橋の下にあった退避場所へ退避させたと言います。

「奉安庫」（大学文書館蔵）

### 「奉安殿」と「奉安庫」のその後

戦後、「教育勅語」謄本・「御真影」は文部省へ返却処分となりました。北大では、「奉護」施設ではなくなった旧「奉安殿」建物を事務局の書類保存庫に転用し、「奉安庫」も貴重資料の金庫に利用しました。旧「奉安殿」建物は一九八〇年十二月に取り壊しとなります。行き場を失った「奉安庫」は、モデル・バーンにある牧牛舎に移され、長く置きっ放しになっていました。二〇一七年九月、大学文書館は、関係者の協力を得て、「奉安庫」を歴史的資料として移管を受けました。以来、展示ホールに鎮座在し、往時の様子を伝えています。

旧「奉安殿」建物（1980年撮影、大学文書館蔵）

正門から附属図書館前を通ってクラーク像に至る道に現在も掛かってる、あの橋の袂です。